

## ネパール・トレッキング

多田 英治

今となつては楽しい思い出ばかりのトレッキングだったが、登り下りとも体力限界に近い毎日だった。石楠花やスマイレ草に癒され、滝あり、猿や水牛に出会いときには雪山を望みながら、雪に降られ、雷雨に遭い、自然の中の不思議な自分を感じながらのトレッキングだった。

トレッキングを始めても間もなく目に入ってきたのは棚田の広がりである。山全部が段々畑のように作られていて、日本の棚田とはスケールが違う。その棚田の上に人家が立ち、畑に出るだけでも農作業は大変だと思った。

宿はすべてロッジ。ベニヤ板一枚の壁で、人が歩くと部屋が揺れるところも。電気は来ていたが停電するし、充電器は使えなかつた。ヘッドランプは必需品だ。寝袋や荷物はポーターが運んでくれ、食事は同伴の炊事シエルパが準備してくれた。自分のリュック一つの歩きだが、それでもきついなと思った。

特に四日目は早朝ゴラバニのロッジを出発、ヘッドランプを頼りに展望の丘プーンヒル(三二〇〇呎)に登り、朝焼けの八千呎級のアンナプルナ、ダウラギリを目の当たりにした。朝食後、ヒレ(一五二四呎)まで一気に下つた。

登りよりきつく、足の痛さは極限までに達したが、なんとか自力で下山できた。道は岩で整備されているが、驢馬の糞が随所に落ちておりこれを避けるだけでも一苦労。雨が降り始め合羽を着けて歩き始めると晴れになり、脱いだとたんまた雨がという変わりやすい天気にも翻弄された。

どこのロッジにも水道は来ているようでこの点は素晴らしいと思った。ただし飲用はだめで、煮沸したお湯が出された。乗り物のハブニングが三件。初日カトマンズからポカラ

まで移動の飛行機が霧のため欠航となり、マイクロバスで六時間かけて移動。その二はポカラから出発点のナヤプルへ大型バスで移動。下車して間もなくエンジンから白煙がもうもうと、ボンネットを開けたら炎が上がり、運転手が水をかけて消し止めた。三つめはポカラへの帰り道、峠の途中でエンコ、エンジンを調整するもダメ、山で使った料理用の燃料を注入して動き出す始末。

最終日のカトマンズでは、遊覧飛行機で空から雄大な雪のエベレストを始めヒマラヤの山々を眺めることが出来て感動した。一人ずつ操縦室にも案内されパノラマの景色を見せてくれた。円高のおかげで安かつた。

カトマンズ市内の交通は車が多く、信号も無く交差点など心臓の強いものでないと渡れない有様。乗っている我々は驚いたり笑ったりであった。

(後で聞いた話だがロッジへの連絡は今でも飛脚とか)



## 雹も降る

多田 英治

国内線待つこと半日霧襖  
歩一步シエルパと登る花すみれ  
棚田焼く山を遥かに驢馬の列  
石楠花の森越えてよりダウラギリ  
妻に蹴く山径汗の出るばかり  
雹降ればひとしほ騒ぐ猿の群れ  
早暁の径黙々と雷の後  
朝焼けの霊峰生命は尊しと  
汗拭ひ馬糞まみれの下り坂  
値踏みする手織りマフラーニルピ―